

神吉研究室
台湾調查旅行記
2017.9.25-27



Kanki Lab
Field Trip to Taiwan

神吉研究室 台湾調査旅行記

2017.9.25-27

2017年11月発行

発行

神吉研究室

編集

角谷遊野

旅行企画

安久里沙

角谷遊野

旅行参加者 / 写真・文

神吉紀世子

太田裕通

加登遼

山口直人

清山陽平

吹抜祥平

山本雄志

金丸巖太

角谷遊野

原泉

田中郁美

安久里沙

浅田英亮

倭昂司

鈴木保澄

山地崇博

Liu Ying

Special Thanks

宗田昌人先生

Wu Jin-Yung 先生

延藤安弘先生

溪洲部落の皆様

長谷川直子様

郭雅雯様

表紙：溪洲部落周辺の河川敷の景観

目次

はじめに 2

旅程 4

溪洲部落 6

文：安久里沙

写真集

宮原眼科 8

文：原泉

写真集

緑光計畫と審計新村 10

文：田中郁美

写真集

台中国家歌劇院 12

文：金丸巖太

写真集

彩虹眷村 14

文：山本雄志

写真集

台湾大学社会科学部棟 16

文：吹抜祥平

写真集

迪化街 18

文：角谷遊野

街歩きの中で 19

写真集

あとがき 21

はじめに

記念すべき神吉研究室ゼミ旅行冊子 vol.2 は、「台湾」である。

1 日目は卒業設計のエスキスを行った後、延藤先生から紹介していただいた宗田先生に、溪洲部落を案内していただいた。その後、プレゼンテーションを通してさらに理解を深め、アミ族伝統の山菜料理を楽しんだ。万全の準備をして下さった宗田先生や、フレンドリーな現地の方々のおかげで溪洲部落を肌で感じる事ができた。

2 日目は、主に台中を見学した。京大建築の博士課程で学位をとった郭さんとお会いしたり、お酒落な宮原眼科やリノベーションスポットである緑光計畫・審計新村、伊東豊雄による台中国家歌劇院、家を守ろうとして生み出された壁面アートが広がる彩虹眷村を見学したりと盛りだくさん。台北に帰った後も夜市へ行き昼間とは違った雰囲気を楽しむ等、朝から晩までよく歩いた 1 日となった。

3 日目は、4 回生のエスキスをホテルで行い、これまた伊東豊雄によって建設された台湾大学社会科学部棟の見学ツアーに参加した。その後は適宜解散とし、昔の街並みが残る迪化街や台湾の間屋街と呼ばれる華陰街でまちの雰囲気や買い物を楽しんだ。

3 日間とも天候に恵まれ(恵まれすぎて暑すぎたという面も否めないが)、怪我もなく、学ぶことが多い充実したゼミ旅行を送ることができた。頼りないゼミ旅行係であったにもかかわらず、こうして無事にゼミ旅行を終了することができたのは、宗田先生や郭さん、神吉先生、角ちゃんや金丸さん含め研究室の方々のおかげであり、感謝の気持ちでいっぱいである。ここに感謝の気持ちを記させていただくと共に、この冊子が旅行を思い返す、一冊の楽しい読み物となることを願う。

(安久里沙)



オペラハウスの前でけんちく体操。

旅程

2017.9.25-27

9.25(月)

- 08:00 関西国際空港に集合
- 10:00 ~フライト
- 12:00 桃園国際空港に到着
- 13:00 台北のホテルに到着、4回生エスキス
- 15:00 ~宗田先生の案内で溪洲部落を見学

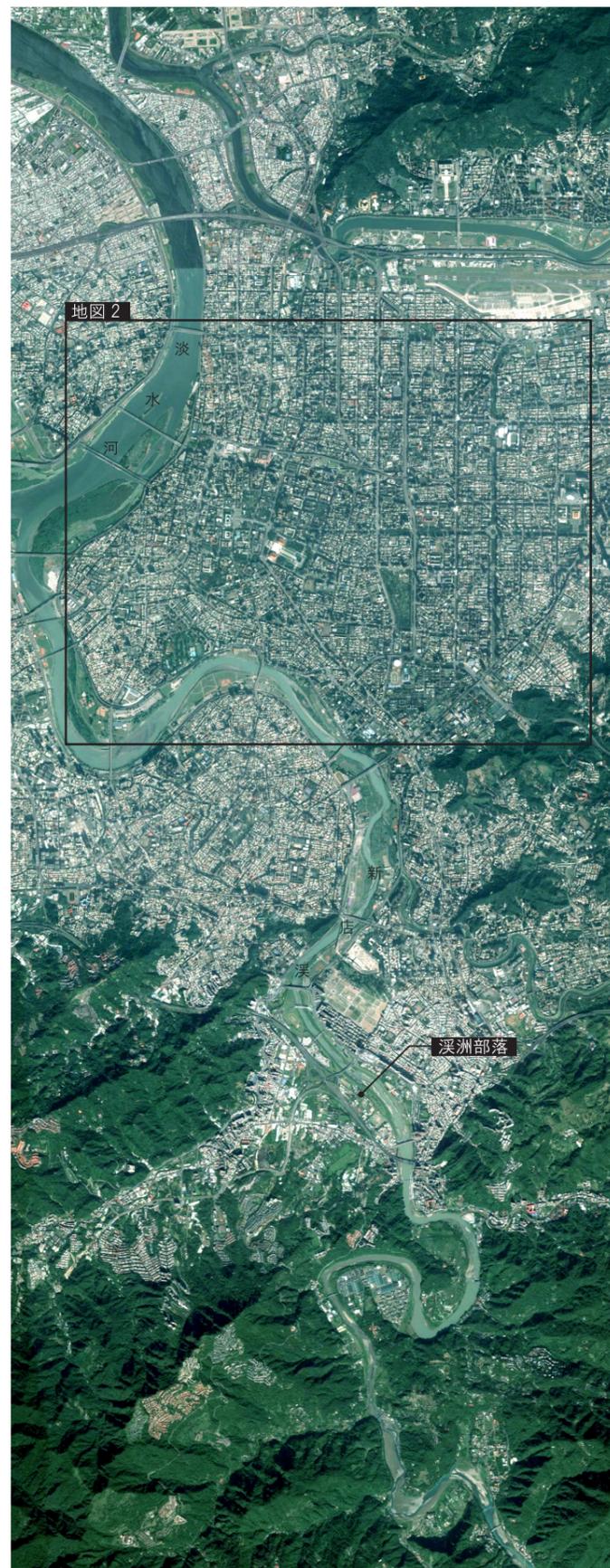
9.26(火)

- 07:45 ホテル出発、高鐵で台中に向かう
- 09:42 台中に到着
- 10:00 ~宮原眼科を見学
- 11:00 ~春水堂創始店にて郭さんと会食
- 12:25 ~緑光計畫、審計新村を見学
- 14:10 ~台中国家歌劇院を見学
- 17:00 ~彩虹眷村を見学
- 19:00 ~高鐵で台北に戻る
- 20:00 台北駅に到着
- 自由行動、寧夏夜市で夕食

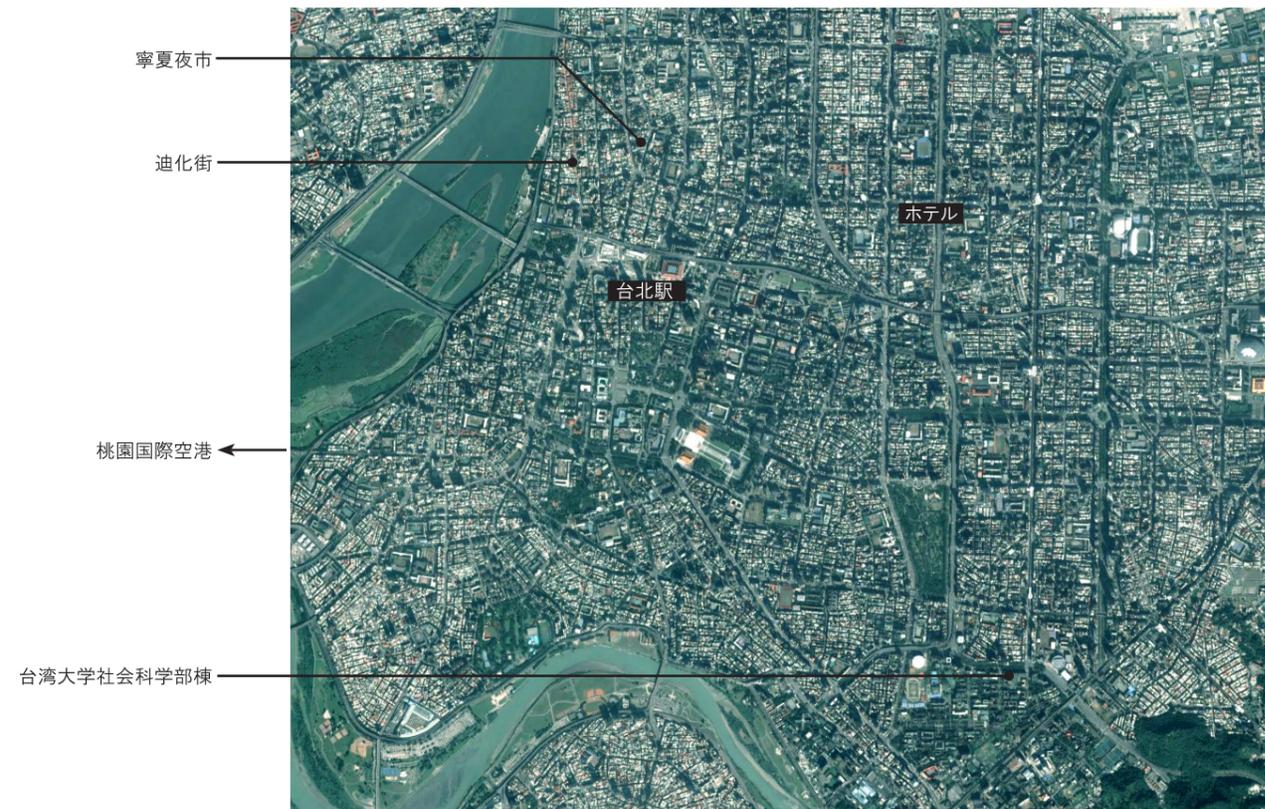
9.27(水)

- 08:00 ~ホテルにて4回生エスキス
- 10:50 ~台湾大学社会科学部棟図書館を見学
- 11:40 ~自由行動(迪化街など)
- 14:00 ホテル出発
- 15:00 桃園国際空港に到着
- 17:10 ~フライト
- 21:20 関西国際空港で解散

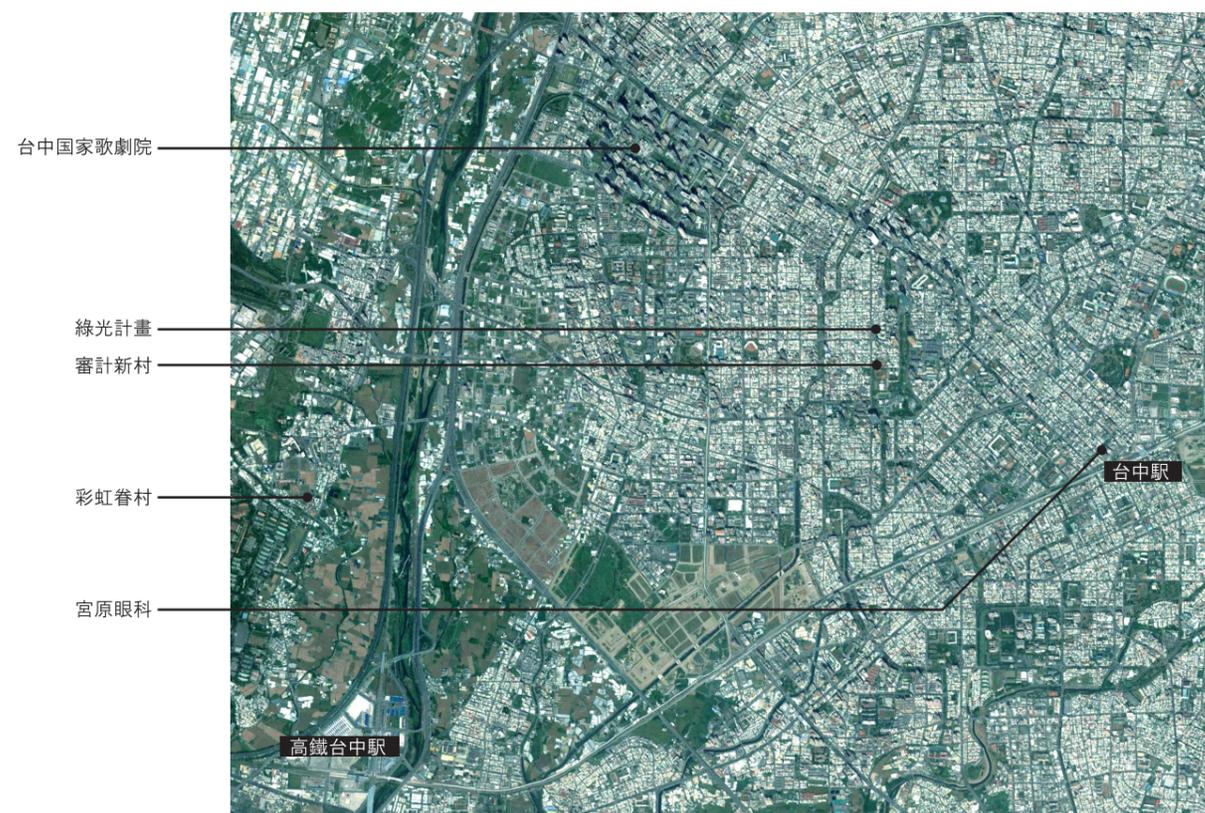
滞在先ホテル
六福客棧(レオファーホテル)
台北市長春路 168 號



地図1. 台北広域図



地図2. 台北



地図3. 台中



溪洲部落

新北市 新店区

Xizhou Community

Xindian District, New Taipei City

台湾の原住民、アミ族（阿美族）の集落。都市化が進む台北のなかで、数少ない残された都市原住民の居住地。台北市が進める河川整備のため立ち退きが決定したが、交渉の末、隣接する堤防の上の敷地に再建されることになった。新しい居住地の計画は、コーポラティブハウスとし

て住民主体のプロジェクトが行われ、2017年中に着工が予定されている。現地で一連のプロジェクトに携わっておられる宗田昌人先生と Wu Jin-Yung 先生に案内をお願いし、集落での暮らしぶりやプロジェクトの経緯などを解説していただいた。



MRT 新店駅から徒歩 20 分。そこに溪洲部落がある。溪洲部落は、戦後の経済発展に伴って、3,40 年前出稼ぎで台北へ来たアミ族が、故郷の花蓮と風景が似ているということで休日に過ごすようになり、そのまま住み着いてできた集落である。そこに住む人たちは、食べ慣れたものを食べたいという思いから、故郷で育てていた作物を溪洲でも育てるようになった。自給自足の生活であり、工事現場の型枠を利用したりしながら自分たちで家も建てていた。火災や水害が起こった後もその地を離れたいという人々はおらず、話し合いながら再建を行ってきた。屋内外を融合させたような空間は、夜に人々が集いお酒を飲みながら談笑する場所と化す。子供はその場所の周りで遊びながら、大人たちと関わりあい、社会を学ぶ。その内部のつながりの強さと、彼らのフレンドリーさにただただ魅せられた。2007 年、そんな溪洲部落を襲ったのが、防災強化のための行政からの立ち退き要請である。溪洲はもちろん国に抗議をし、それに対する国の態度が問題視されたことがきっかけで話題になり、台湾大学の人と共に住民と行政との折衷案を模索することになった。その結果、

国立公園になる予定だった場所に住民の家が移転・再建されることになり、参加のデザインを用いながら、家や路地のデザインが決められた。どこの場所に誰が住むのかを決めるプロセスは、コーポラティブハウスで言う”陣取り合戦”のようなものであり、また、溪洲部落内の人々のつながりの強さは、京都の「ユークート」と似たようなものを感じた。そもそも溪洲部落の見学に至ったきっかけは、飲み会中に延藤先生が偶然「台湾で原住民が住み着いている地域があって、今たまに台湾行っているんだよ～」と口にされたことだった。延藤先生にお会いするきっかけになったのも、私（あぐ）がコーポラティブハウスに住んでいたということからであり、こうして考えるとすごく偶然的組み合わせから物事は動き、人はつながっていくんだなあとしみじみと感じている。貴重な経験をさせてくださった、宗田先生や現地の方々、延藤先生には感謝してもしきれない思いである。アライ。

(安久里沙)



鉄筋と同化する植物（吹抜）



おそとご飯（加登）



軒下の使いこなし（太田）



手入れされた畑（田中）



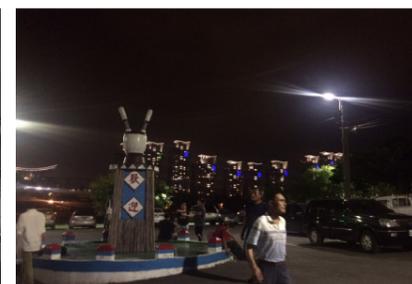
プールのあれ（山本）



シンボル（山口）



セルフ・ビルドによる増改築の重跡（清山）



部落の広場から高層ビルが見える（鈴木）



マットレスのパーティーとかぼちゃ（倭）



川を挟んだその向こうには（金丸）



パンチ！！（安久）



時間軸のあるナラティブ的計画（太田）



ジェットコースター感（原）



橋脚のサイズ感がいい（山地）



ウォーキングコースを鴨川よりたくさんの方が利用していた 計画が文化になっていくのを感じられて良かった（浅田）

宮原眼科

蘇丞斌建築師事務所

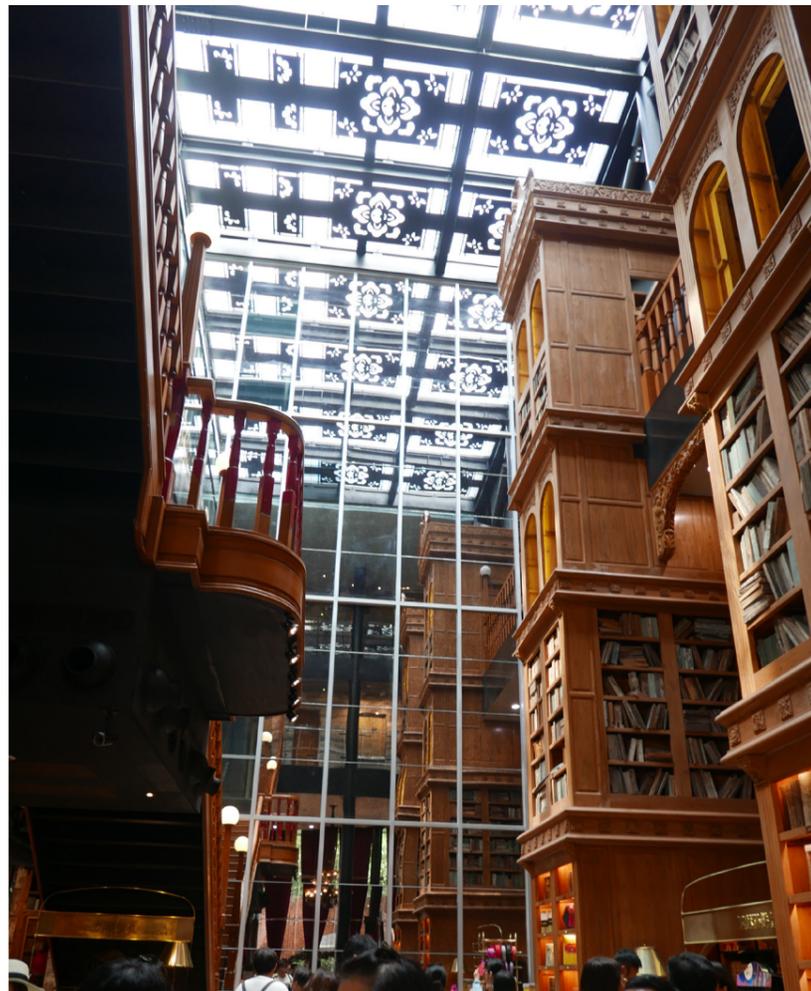
台中市、中区 2010(改築)

Miyahara Ophthalmology

SU Architecture & Interior Design

Central District, Taichung City 2010(reconstruction)

日本統治時代に建てられた眼科医院を改装した店舗。921大地震で損傷した建物を修復し、鉄骨で補強している。パイナップルケーキなどで有名な台中の人気スイーツ店「日出グループ」が運営し、レンガ造の建築を活かしたメルヘンチックな内装で、台中の目玉観光スポットになっている。



うっすらと「台中市衛生院」と書かれた門をくぐると、足元に「宮原眼科 1927」という文字が。その周りを這う蟻たちに誘われるように中へ入ると、そこにはおとぎ話のような世界が広がっていた。吹き抜けの大空間に豪華な本棚が並べられ、店の中は沢山の人があふれている。上を見上げて光り輝く店内に圧倒されている人もいれば、目をキラキラとさせ腕いっぱいスイーツを抱えながら商品を見てまわっている人もいる。ディズニーランドのお土産屋さんみたいな高揚感にあふれているなどと思った。

吹き抜け部分から左にそれと天井の低い空間が広がっていて、店内の雰囲気がガラッと変わる。木造の柱や梁が多く残されていて落ち着いたゾーン。この奥にも本棚があったが、並べられているのは実は本ではなく木の板だった。リノベーションした際に出た木片を並べているようだ。よく見ると店の外のレンガ部分にも梁や鉄骨を抜いたような穴があったり、眼鏡の形の

標識のようなものが壁から出ていたり、当時の面影を残しているものが沢山あった。

印象的だったのは新築部分に様々な素材が使われていたこと。レンガのアーチが連続する外廊下は天井がベージュの木の所と黒い塗装の所があったり、内部は銀のサッシの軽い感じと黒い柱や巨大な本棚の荘厳な感じが共存していたりと、一つの空間に色々な素材が見られるのが面白かった。また、スイーツと本と眼科という掛け合わせに関連性がなくて、ここは何の店なんだろうと不思議な気持ちになった。この全体的な統一感のなさが逆にこの店の独特の雰囲気を醸し出しているのかもしれない。

店内の観察ばかりに時間をかけてしまったが、1つくらい自分用のスイーツを買っても良かったなあと思っている。次来たときは上の階のカフェやサロンにも行ってみたい。

(原泉)



新旧のバランス (倭)



ふわふわフィルム (加登)



アリの行列 (山口)



光差し込む天井 (安久)



図と地 (太田)



歩道が半分取り込まれてる (山地)



形ある光 (金丸)



さんかくスタンプ (田中)



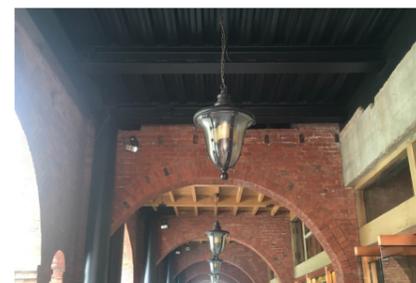
意図されたフェイク・デザイン (清山)



梁がかなり低いところにある (鈴木)



眼科名物 EYE Scream (山本)



素材が変わる天井 (原)



張弦梁がキラリと光る (角谷)

緑光計畫

台中市、西区 2013(改築)

Fantasystory_Green Ray

West District, Taichung City 2013(reconstruction)

戦後まもなく建てられた台中水道局の宿舍を改装した、ショップやカフェが集まる複合施設。12棟の建物からなる。緑を組み込ませて再生するというコンセプトで、古い建物の魅力を活かしている。



審計新村

台中市、西区 2015(改築)

Shen Ji New Village

West District, Taichung City 2015(reconstruction)

1969年に建てられた公務員宿舍を改装したクリエイター村で、若いクリエイターのショップが20軒ほど集まっている。もとのRCとレンガの建物は、戦後台湾における重要な公共建築物である。



共にリノベーションされた建築である審計新村 (Shen Ji New Village) と、范特喜緑光計畫 (Fantasystory Greenray)。この2つは5分ほど一本道を歩くと辿り着く距離にある。

まず私たちが訪れたのは審計新村。ここは1969年に建てられた2階建て公務員宿舎である。2013年に改装され、現在は若いクリエイターのショップが20軒ほど集まっている。それぞれの店がファサードやインテリアに工夫を凝らし、個性ある表情を見せている。現在、同じ棟の1階と2階には別のショップが入っているが、屋内に階段があることから、もともとは上下を同じ主が使っていたのであろう。この階段は現在、封鎖され役目を終えているが、階段を展示や植物を置く棚に使うなど、上手く使いこなされていた。このような使いこなしがリノベーションの醍醐味であろう。現在の2階へのアクセスは新たに作られたデッキを使う。雑貨やカフェに目移りしながらこのデッキを歩いていると、パッと視界が広がり、1階にいる人々の様子が見える。上がったりがつ

たりしながら、この建築の様々な表情が見える。気持ちのいいデッキだった。

次に訪れた范特喜緑光計畫は戦後間もなく建てられた台中自來水公司(台中水道局)の12棟の2階建て宿舎を元としている。2015年に改装され、現在はショップやカフェが集まる。英語名にあるFantasystoryは何だかメルヘンチックな建物を連想させるが、レンガとRC造の建物である。(ちなみにFantasystoryは台湾各地でリノベーションを行っている民間業者の名前である。)緑を組み込ませて再生するというコンセプトでリノベーションされている。台湾北部は亜熱帯であることから、先ほどの審計新村も日本より緑は生い茂っていた印象だったが、こちらはどこを見ても緑がふんだんにあり、屋外の写真には必ず緑が入り込んでくるほどである。2階は広々としたテラスで明るい印象、1階は全体的に暗い印象だったが、中庭から差し込んでくる光が緑と相まってさわやかな印象を感じさせた。(田中郁美)



世界観がかっこいい(山地)



対比(山口)



植物の種類が明暗の印象に影響している(鈴木)



2階はつかいませぬ(金丸)



店舗ごとに異なる地面(原)



緑に隠されたメニュー(安久)



既存の意匠が活かされている(角谷)



木との距離(太田)



デッキで数メートル浮いて、不思議なスケール感。(清山)



座りたい。(加登)



ハッピーな色彩とスラブの削り跡(倭)



店毎に階段の魅せ方が異なる(山本)

台中国家歌劇院（台中メトロポリタンオペラハウス）

伊東豊雄建築設計事務所

大矩聯合建築師事務所

台中市、西屯区 2016

National Taichung Theater

Toyo Ito & Associates, Architects

Da-ju Architects & Associates

Xitun District, Taichung City 2016

台中の再開発エリアに建設された、大型公共コンサートホール。大中小の3つの劇場を有する。2005年の国際設計コンペで伊藤豊雄の設計案が採用された。サウンド・ケープと呼ばれる、天井・壁・床が一体となった白い洞窟のような内部空間が特徴。構造設計は建築構造家のセシル・バルモンド、施工は台湾のゼネコン麗明營造が担当したが、RCの曲面による独自の構造を実現するために施工は困難を極めた。周辺は台中の都市計画区・第7期にあたり、新市庁舎と市議会、高層ビルが立ち並び、新しい政治・経済・文化の中心地区になっている。



台北から新幹線にゆられること1時間、台湾第三の都市台北にその建築があった。

2016年9月末にオープンした、伊東豊雄氏設計の世界九大新ランドマークの一つでもある台中国家歌劇院。カテナイドと呼ばれる三次元曲面の構造体で構成され、床・壁・天井が切れ目なくつながり、ホール、ホワイエ、ロビーといった空間が水平垂直に枝分かれしながら連続する。楽器や動物の器官を思わせる有機的で、どこか洞窟にでも迷い込んだかのような建築。

真っ先に目を引いたのは、盃のようなその外観であった。ボックスの中に有機的なカーブがデザインされており、ガラスを通して見える吹き抜け空間に高揚した。内部空間に至っては床・壁・天井が連続して続いており、去年のゼミ旅行で体験したザハ・ハディッド氏設計の東大門デザインプラザと同じく近未来的なデザインであった。

もう少しマクロなスケールで見ると、目の前に芝生の広場が広がっており（ちょうど訪れた時は芝生を刈っている最中で実際に

使われているかはわからない）、周囲を高層マンションが取り囲んでいる。驚くべきはそのマンションの建設スピードで、2006年頃から開発・建設ラッシュが始まり今では写真2のような景観を作り出すまでとなっており、アジアの成長力を感じるとともに、洞窟の中から見る外の景色はあたかも自分が古代人で近未来的な景観を見ているようでもあった。

ただ、洞窟のような内部空間が外部と立面で分断されており、動物的というよりは理性的な雰囲気を感じた。内部と外部の境界をどのように設計するか、都市的な視点からもう少し考察してみたい。

総じて日本ではできない空間体験ができたように思う。次回は時間の関係もあり、訪れることのできなかった各劇場にも足を運んでみたい。

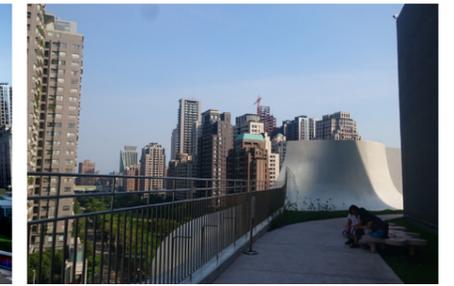
（金丸 徹太）



街並みと。（加登）



都市軸とがっぶり四つ、な巨匠建築。（清山）
=写真2



ファンタジアからの景色（山口）



屋外ホール（安久）



古代人の視点（金丸）



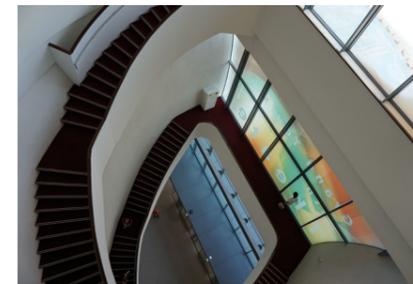
オペラハウス屋上 周り的高層ビルから隠れることができ、ニュキニュキしていることになんとなく納得した（浅田）



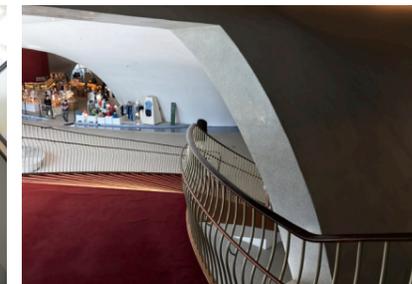
全員集合！（原）



ペンキ塗りおじさん（田中）



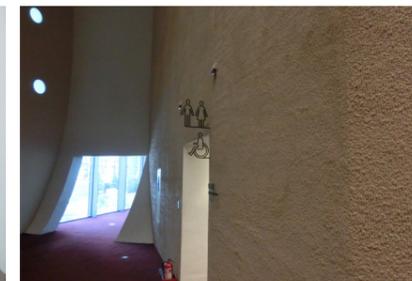
大きな螺旋階段から人々の動きが見える（鈴木）



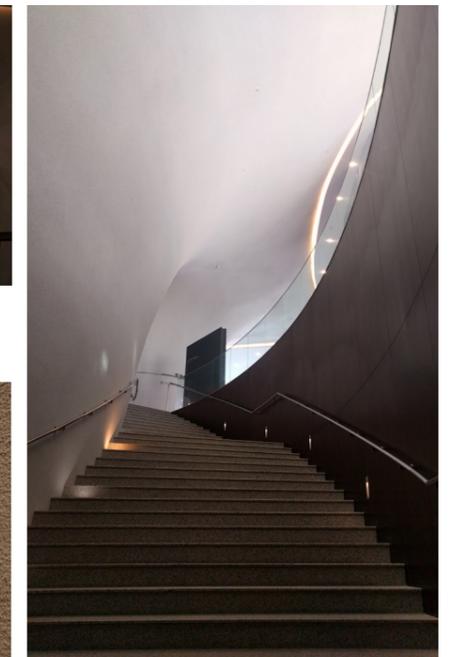
壁を潜り抜けるのが楽しい（山地）



外観の無い伊東建築1（太田）



土壁風の粗い仕上げ（角谷）



吸い込まれるようなアプローチ（倭）

彩虹眷村

台中市、南屯区 2008 ~

Rainbow Village

Nantun District, Taichung City 2008~

眷村とは、第二次大戦後に国民党によって台湾各地で建てられた公共住宅。彩虹眷村は台中の再開発区にあり、取り壊される予定だったが、2008年頃から住民の老人が村中の建物の壁に絵を描きはじめたことがきっかけで、台中の人気観光地として復活した。



彩虹眷村は観光地である。多くのホームページには、村在住の黄永阜という一人のおじいさんがある日突然村の壁に絵画を書きはじめたこと、その反響で村が観光地化し、台中市の再開発計画を逃れたことが、おじいさんすごいですよね、という文脈で語られる。実際私にとってもこの村の第一印象は、国策か個人かの違いはあれど、絵画によって町おこしをした韓国の梨花洞壁画村と似ているのではないかと、というものだった。隙間なく装飾された極彩色の壁面や通路（しかも村の敷地外にもはみ出している！）は、周囲の建物に対してあまりに異質であり、関連グッズを所狭しと並べるお店にも、なんとなく胡散臭い雰囲気を感じてしまっていたのだ。しかし後からひも解いてみると、この眷村という言葉からは台湾が抱える複雑な歴史の一端垣間見ることができる。眷村というのは“中国における内戦時代（1927～1949年頃）に、台湾に駐屯した国民政府の軍隊の兵士とその家族が生活した村の総称”¹⁾である。中国各地の文化が混ざる眷村では、台湾の文化でも中国の文化でも日本の文化でも

ない、混ざり合った何かが形成されていたようだ。台湾政府の施策によりこの村の取り壊し・マンション建設が進む中、絵を描くという行為で結果的に村の形態を残した黄さんのすごさは、建物の合間の色が塗られていないところや、開口部からチラリと見えるペンキ置き場となっている内部空間、建築全体の配置や形態から垣間見えるのかもしれない。人の住む気配はもうなかったが、このコミュニティに所属していた人たちは今どこに住んでいるのだろうか。あの商店がかつての住人をつなぐ強い接点になっているのかもしれない、と思いを馳せながら、極彩色のアイスの冷たさを思い出して筆をおくことにする。

(山本雄志)

1) 陳雅玟 (2015), 台湾眷村における伝統的生活文化の特質, 日本デザイン学会 日本デザイン学会 第62回研究発表大会



インスタ映え (太田)



極彩色 (山口)



フォトジェニック (安久)



隙間のリアリティ (山本)
むなしさ (山地)



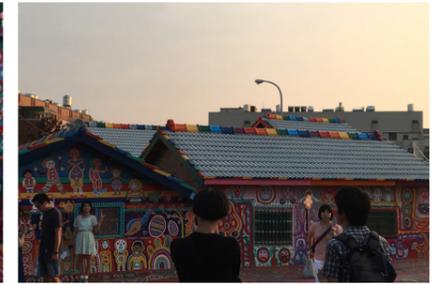
老兵により残された眷村、チョコみたいにかわいいスケール。(清山)



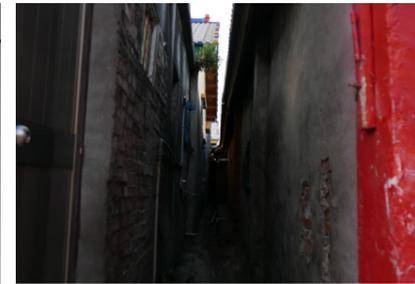
独特な遊具 (浅田)



瓦や様々な部材の裏側まで色が塗られている (鈴木)



レゴのような (金丸)



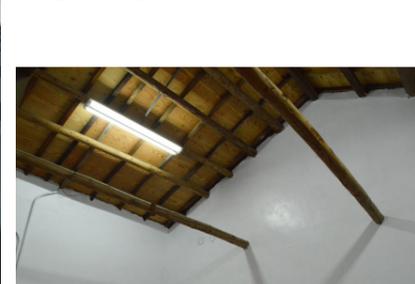
見える壁、見えない壁 (吹抜)



頭上注意!!! (原)



独特の素材感の屋根 (倭)



中は白い (田中)
シンプルな屋根裏 (角谷)



おじさんの仕事場 (加登)

台湾大学社会科学部棟 辜振甫先生紀念圖書館

伊東豊雄建築設計事務所

宗邁建築師事務所、大涵學乙設計工程

台北市、大安区 2013

Koo Chen-Fu Memorial Library

Toyo Ito & Associates, Architects

Fei & Cheng Associates, Jay Chiu Architects & Associates

Da'an District, Taipei City 2013

森をコンセプトにした開放的な図書館と、その背後の教室棟。図書館の家具は日本の家具デザイナー、藤江和子による。教室棟は細長く配置されて各所に吹き抜けやポイドがあり、風が抜けるつくりになっている。

図書館の見学はガイドツアーを予約し、司書の方に案内して頂いた。



MRTの駅から歩くこと10分程、伊東豊雄氏設計の「台湾大学社会科学部図書館棟」は表通りから8階建ての「社会科学部教室棟」を挟んだ裏にある。これらは2棟とも伊東豊雄氏の作品であるが両者の性格は大きく異なる。

まず訪問したのは図書館棟である。同じく氏の作品であるぎふメディアコスモスよりこじんまりとしており、「木漏れ日」が降り注ぎ、また書架の間のくねくねした道から、森のような空間という印象を受けた。一方で機能面では閲覧スペースと書架のみと均一的であり、空間的な不均一性と対比された。

次に巡ったのは現代建築である教室棟にある会議スペースや開架・閲覧スペースである。というのもこの図書館は予算上全ての図書館機能を図書館棟に収めることが出来ず、教室棟と図書館棟の二つに分けているのである。教室棟には図書館外ではあるものの、中層部に空中庭園が設けられるなどオープンスペースの配慮がみられた一方で、基本的な空間構成はグリッド

状であり、図書館内の自習室では学生が静かに勉強していたものの、会議スペースはクローズな室に置かれておりやや寂しい印象を受けた。

二つの空間を回り、自分の中でこの図書館の機能再配置を考えてみた。図書館棟に書架・閲覧機能の他会議、映像閲覧など様々な機能が存在することで森のような不均一さを持ち、歩き回るとに発見があるような空間ができるかもしれない。一方で教室棟の平面グリッドは空間分節に優れるため個人が集中して取り組む作業に向いているかもしれない。書架にも図書館棟には多様な人が手に取れる入門書、教室棟には専門性の高い書籍を配置したらどうだろうか…。ここまで考えて私は図書館機能のうち「交流機能」と「作業場機能」に注目していることに気が付いた。近年図書館の「交流機能」に着目した建築は多いが、「交流」と「作業」が共存するような空間構成もまた求められるのかもしれない。

(吹抜祥平)



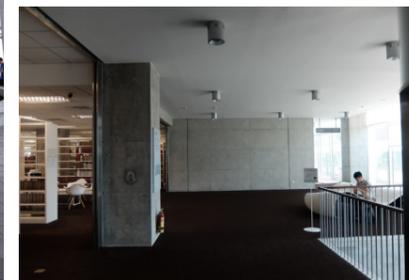
大学スケールの広大なテラス (倭)



見栄え (金丸)



あつ。(加登)



2階はかつちり (山本)



きのこ (山地)



ざらざら柱 (田中)



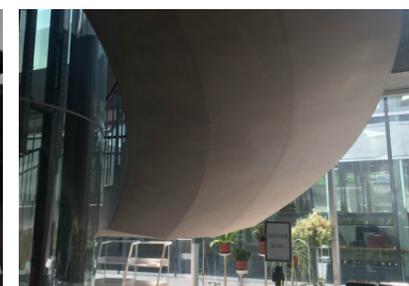
背板がつくる抜け感 (山口)



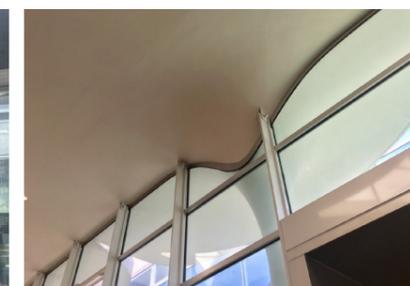
垂れて薄く広がってルーフ (清山)



司書さんが建築コンセプトを饒舌に語っている (太田)



生き物の様な階段裏 (原)



外と中の境目 (安久)



外観の無い伊東建築2 (太田)



竹集成材の家具 (吹抜)



建築の意匠からとった椅子のデザイン (鈴木)

迪化街

台北市、大同区

Dihua Street

Datong District, Taipei City

迪化街（てきかがい）は、清朝末期（19世紀）から続く問屋街。古いバロック建築の商店が立ち並ぶ。現在も台湾一の漢方、乾物、布問屋街として賑わっている。台北の歴史と生活を感じることのできるエリアとして、観光客にも人気。



清朝時代から近代まで、様々な時代のファサードを持ったショップハウスが立ち並ぶ、賑やかな街並み。どの建物にも共通する最大の特徴は、亭仔脚（ティンアカ）と呼ばれる軒下の空間だ。1階の手前がピロティになっていて、それが左右で繋がりアーケードを作り出す。日差しや雨を避けながらどこまでも歩いて行ける。台北の気候は亜熱帯で、9月はまだまだ夏の盛り。うんざりするような蒸し暑さの中に身を置くと、日陰のありがたさがよくわかる。しかしアーケードはそれだけではない。道路側にまで商品が所狭しと並べられ、店の一部としても使われているのだ。同様のアーケードは台北や台中のいたるところで見られた。そしてやはり、アーケードに商品やら椅子を並べたり、バイク置き場にしたりと、私的な利用がされている場面も多い。ものに溢れた回廊の中を、人が縫うように歩いていく。外部の日陰の空間を豊かに使っていくとする気風は溪洲部落でも特徴的だったが、もしかすると台湾の全ての人々に共通なのかもしれない。

アーケードは清朝時代から自発的に作られることもあったが、日本統治時代に設置が義務付けられ、台湾全土の都市で作られるようになった。現在も幅員7m以上の道路に面する建物ではアーケードの設置が義務付けられている。法律上はアーケードの所有権は建物の持ち主にあるが、私的な利用はせず、公共空間として開放することが定められている。しかし実態は上述のように私的な利用が行われ、取り締まられている様子もない。法律と矛盾する使われ方が、曖昧なまま許容されている様子は面白い。とにかくアーケードは台湾の気候と生活に合致し、台湾の街にとって欠かせない骨格となっている。台湾で一番古い街を歩いてみて納得した。

それから、迪化街の古い屋台で食べた、緑豆のかき氷。あの暑さの中で生き返るような心地がしたものだ。これもまた、台湾の街にとって欠かせないものだろう。

（角谷遊野）

街歩きの中で



階が反復していることが目立つデザインで迫力があつた（浅田）



快晴（金丸）



アーケードのある、台湾の典型的な断面？（角谷）



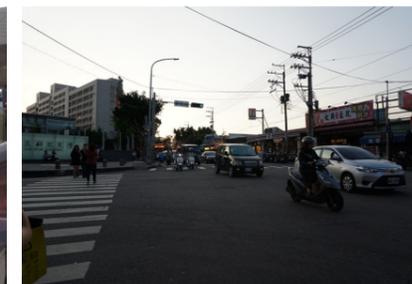
宿～駅間の脇道。鮮やか。（原）



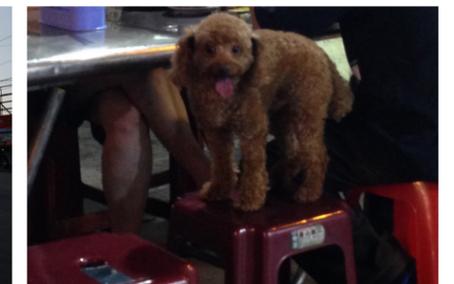
屋根大事（田中）



タクシーの窓から（浅田）



日本では見えないほどの交通量（鈴木）



台湾の犬はリールが付いてなかった お利口というか野生的というか（浅田）



毎晩の熱気（清山）



僕は吹抜です（加登）



ダンサー集う中山駅地下（山本）

街歩きの中で



お昼のマーケット（加登）



華陰街。期待感1。（山口）



華陰街。期待感2。（山口）



銀行のファサードがかっこいい（角谷）



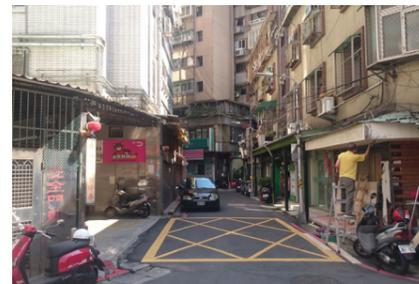
「防空避難場所」@ 台中（吹抜）



華陰街。生鮮ゾーン。（山口）



豊かな看板（加登）



華陰街。メインストリートの外れ。（山口）



駅舎の屋根がかっこいい（角谷）



トラスがかっこいい（山地）

あとがき

昨年度、研究室のソウルへの調査旅行について、まとめ冊子の編集担当の院生氏がその完成したPDFファイルをホームページにアップロードした直後に、早速読んで感想を寄せてくださったのが延藤安弘先生だった。そして今年の台北・台中への調査旅行の初日、目的地は日本では延藤ワールドとしても知られる台湾新店の溪洲部落であった。大都市台北の縁辺部の河川沿いにある、アミ族の人たちの居住地が、いったん河川整備のための立ち退きが決まりそうだったところに、様々な支援や議論の展開があって、ほぼ現地でコーポラティブ居住地を建設して地域継続されることになったところである。そういった概略は伺ってはいったものの、その手づくりの居住地があり続けることの意義がみなおされ、台湾大学や建築事務所の方々とともに協力が広がり、河川整備との調整も実現して継続できる、それはほとんど想像を超える話でもある。その実を知りたくて訪れる者は、コーポラティブで家をつくりそこで生きることが、「住宅供給」といういわば限られた範囲にとどまる話ではなく、文化や歴史を礎に集まって自立して生きる地域社会の尊厳を扱う営みであるということを目撃することになるのだろう。現地で宗田昌人先生や Wu Jin-Yung 先生お2人のインタープリテーションに沿って、とびきり暑い昼下がり川風をわずかに感じる夜に至る半日、歩いて座って見て聞いて話して食べて飲んで納得したことは、大都市台北の建設を遠方から来て担った人々が、縁辺でひっそり築いた居住文化が今では提案性ある都市居住文化としても評価されつつあることであり、彼らの出身地と出先の大都市との関係のあり方に流れ込む遠方の文化の着地の瞬間であった。大きなシステムとして拡大し続ける都市の扱い方を、機械論的制御に閉じこもらずに多様性を開放していく方向へと総合的に判断できる、力強い流れであった。

このあと、院生諸氏の企画により台中・台北の各所をまわった。摂氏36度越えの酷暑の3日間、いかに基準にそっているか、ではなく、いかに個性が表出し開放されているかが、どうやら関心の対象になっていたような印象がある。

（神吉紀世子）



溪洲部落の集会所の前で、先生方と一緒に。



神吉研究室

台湾調查旅行記

2017年12月発行